

2021年度 入試問題

一 次

国 語

注意

- この冊子は17ページまであります。
- 問題は□から□までです。
- 解答用紙は冊子の中ほどにはさみこまれています。
- 時間は50分です。
- 解答はすべて解答用紙にていねいに書いてください。
- 記述は解答欄内に収めてください。一行の欄に二行以上書いた場合は、無効とします。
- 解答用紙のみ回収します。

渋谷教育学園
幕張中学校

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人生の最も大きな喜びの一つは、年来の希望が実現した時、長年の努力が実を結んだ時に得られる。私のような研究者にとって
は、長い間、心の中で暖めていた着想・構想が、一つの具体的な⁽¹⁾理論体系の形にまとまった時、そしてそれから出てくる結論
が実験によって確認された時に、最も大きな生きがいを感じられる。しかし、そういう瞬間は、私たちの長い研究生活の間に、ご
くまれにしか訪れない。私たちの人生のほとんど全部は、同じようなことのくりかえし、同じ平面の上でのゆきつもどりのため
に^(a)費やされてしまう。日々の努力によって、相当前進したつもりになっていても、ふりかえてみると、結局、⁽¹⁾同じ平面の
上の少し離れたところにぎっているに過ぎないことを、あまりにもしばしば発見する。一つの段階からもう一つ上の段階に飛びあが
れるのは、それこそ **X** ほどに、まれなことである。

そんなら人生の大半は、小さくいえばその人の個人としての進歩・飛躍、大きくいえば人類の進歩・飛躍とは無関係な、エネル
ギーの消費に終始しているのであろうか。決してそうではないように思われる。むしろムダに終わってしまったように見える努力
のくりかえしの方が、たまにしか訪れない決定的瞬間より、ずっと深い大きな意味を持つ場合があるのではないか。ずっと若いこ
ろの私は「百日の労苦は一日の成功のためにある」という考えに傾いていた。近年の私の考え方は、年とともにそれとは反対の方
向に傾いてきた。それに伴って、真理の探求の道を歩いた多くの科学者に対する私の評価も、昔と今とで大分違ってきた。

ある科学者が^(b)カツキ的な発見をするとか、基本的に新しい⁽²⁾着想から出発した、ある学説を提唱するとかした場合、私たち
はもちろん、その学者を高く評価する。一言にしていえば、科学者をその業績によって評価する、それは確かに公正な態度である。
どんなにその学者が苦心さんたんしたにせよ、そこから独創的な⁽³⁾業績が生まれなかつたら、多くの場合、私たちはその人の価
値を認める正当な理由を持ち得ないであろう。それはそうに違いない。しかし同時にそれは、外から見た時の、やや離れて見た時
の評価でもある。

ところで、私たちは自分以外の学者の大多数が、どういう苦勞をしているか、何に苦勞をしているかを知らない。自分の身近の
少数の学者について、あるいは遠くにいる学者がある大きな成功を^(c)オサめた場合についてだけ、それらの人々の苦心を知らさ
れたり、関心を持ったりするのである。一人の人間の能力はきわめて限られている。自分以外の多数の人たちの苦勞に一々関心を
持っていたのでは、自分自身が失われてしまうであろう。それもその通りである。

しかし、それにもかかわらず、私は近来、^(y)外から見て、離れて見て、ある人の評価をするだけではないということを、
ますます強く感じるようになってきた。ある人が何のために努力しているか、何を苦勞しているかという面を、もっと重要視しな
ければならないと思うようになってきた。天の羽衣がきてなでるという幸運は滅多に来ない。一度もそういう幸運に恵まれずに一
生を終わる人の方がずっと多いであろう。しかし、だからといって、そういう人の人生は無意味であつたとは限らない。他人は知
らなくても、その人自身は何かについて苦心をしつづけていたかも知れない。その⁽⁴⁾「何か」が重要なことであつたかも知れない。
「どんな風に」苦心したかが重要であつたかも知れない。

絵をかく人は、絵になる以前の⁽⁵⁾イメージを自分の中で暖^{あた}ため育ててきたであろう。彫刻家は素材を前にして、まだ現実化さ
れない理想的な形態を思い浮かべているであろう。科学者の研究が一応完結するまでに、一編の論文となるまでに、どんなに長い
間、生みの苦しみをつづけてきたのか。ついに絵にならない場合、ついに彫刻が完成しない場合、論文が出版されない場合、それ
がどんなに多いか。外から離れて見る者にはわからない。いわばそれは具象以前の世界である。混沌^{こんん}から、ある明確な形態をもつ
た物が生まれるより以前の世界、生まれようとしている世界である。その人自身にとって、また深い関心をもって、その人の世界
を知ろうとする人にとって、それは無意味な世界ではない。

科学文明の発達の結果として、⁽²⁾情報伝達の方法が急激に変化してきた。新聞・ラジオ・テレビ等を通じて、私たちに与えられ
る情報が、ますます重要となり、私たちに圧倒的な影響を及ぼすようになってきた。それは一方では、遠く離れたところで起こっ
た出来事、自分と直接関係のない人々を、身近に感じさせる作用を持っている。他方ではしかし、情報を受けとる個人の特殊性を

越えて、あらかじめ選択された情報を万人に同じように与える作用をも持っている。それは既に具象化されたものの中からの選択である。具象以前の世界は初めから問題になっていない。

情報伝達だけではない。人間の頭脳の機能の一部までも機械が受けもってくれるようになってきた。しかし、そういう機械もまた、既に具象化された⁽⁶⁾知識を適当な記号の形に変えた時にだけ質問として受け入れてくれるのである。そしてその機械が与えてくれる答えもまた、具象化された知識に関するものだけである。

人間は具象以前の世界を内蔵している。そしてそこから何か具象化されたものを取り出そうとする。科学も芸術もそういう努力のあらわれである。いわば⁽³⁾混沌に目鼻をつけようとする努力である。人生の意義の少なくとも一つは、ここに見出し得るのではないだろうか。

(湯川秀樹「具象以前」)

問一 〓部(a) 〓部(c)のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 空欄

X

 に入る言葉を本文中から十字で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問三 〓部①「同じ平面の上の少し離れたところにきているに過ぎない」とあるが、その具体例として最も適当なものを選びなさい。

ア 具象以前の世界に属していた、明確な形をもった研究の構想や計画が、結局は無意味なものであった事実が発覚したということ。

イ 個人として進歩・飛躍をすることができず、同じようなことの繰り返しで無駄なエネルギーを消費してしまっていたということ。

ウ 着想・構想段階にあった研究内容が、論文として発表できる論理体系の状態に、少ししか近づくことができなかったということ。

エ 研究の中で、未だに理論化することのできていない混沌とした部分と、理論体系化された部分とが、同じ段階にあるということ。

オ まだ研究の着想・構想という段階から、新しい理論が形になる段階への移行は行われないような進展の様子であったということ。

問四 — 部②「情報伝達の方法が急激に変化してきた」とあるが、このことについての筆者の考えを、本文全体の内容をふまえて説明したものとして最も適当なものを選びなさい。

ア 既に具象化されたものである遠くの出来事を知ることのできる情報技術は、科学が具象化の努力により実現したものとして評価できる。

イ テレビなどによって、万人に瞬時に同じ情報を与えることは、遠くの他人も身近に感じることができ、他人の正しい評価を可能とする。

ウ テレビなどで既に具象化された情報を得る事は、科学者を研究成果で評価するのと同様に、形になる前の努力を無視する事につながる。

エ テレビなどの情報伝達は、機械と同様に、人類にとっていまだに理論化されていない世界のことを、個人の特殊性を越えて理解させる。

オ 遠くの直接関係のない人々の情報を知ること、自分の知らない人の、具象化以前の世界に対する努力について想像することができる。

問五 — 部③「混沌に目鼻をつけようとする努力」とはどのようなものか説明しなさい。

問六 〰〰部(Y)「外から見て、離れて見て、ある人の評価をするだけではない」とあるが、なぜそういえるのか。本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

問七 — 部(1) (6)の語を、本文の内容に従って二つのグループに分けたとき、どのような分け方になるか。最も適当なものを選びなさい。

ア	「1	6	と	「2	3	4	5
イ	「1	2	3	6	と	「4	5
ウ	「1	3	4	と	「2	5	6
エ	「1	3	6	と	「2	4	5
オ	「1	2	6	と	「3	4	5
カ	「1	4	と	「2	3	5	6
キ	「1	3	4	6	と	「2	5

問八 次のア～オのうち、本文が主に主張しようとしている考え方に沿った文章として最も適当なものを選びなさい。

ア 筆者の湯川秀樹は、1949年に日本人で初めてノーベル物理学賞を受賞したため、偉大な物理学者の一人として評価されている。

イ 夏目漱石は、イギリスへの留学で西洋の社会に影響を受けて考えたことが、帰国後の作品に表現されている、という読み方がある。

ウ グーグルの検索システムは、ネット上に混沌としたまま存在する情報のまとまりに、明確な形式を与えて示してくれるものである。

エ 精神科医で思想家のフロイトは、人間には無意識という自分で支配できない混沌とした領域があるという新説を唱えて評価された。

オ 画家のパウル・クレーは、目には見えない人間の内面を抽象的な絵画で表現したとして有名であり、作品は高値で取引されている。

〈このページは白紙です。〉

二 次の記事を読んで、後の問に答えなさい。

※京都の地域区分のひとつ
京師室町姉小路下る染物悉皆商近江屋宗兵衛の老母おかんは、文化二年二月二十三日六十七歳を一期として、(a)ソツチユウの
※死後極楽浄土に行くという願望
氣味で突然物故した。穏やかな安らかな往生であった。配偶の先代宗兵衛に死別してから、おかんは一日も早く、往生の本懐を遂
ぐる日を待っていたと云つてもよかつた。先祖代々からの堅い門徒で、往生の一義に於ては、若い時からしつかりとした安心を懷
いていた。殊に配偶に別れてからは、日も夜も足りないようにお西様へお参りをしていたから、その点では家内の人達にさすがは
と感嘆させたほど、立派な大往生であつた。

信仰に凝り固まつた老人の常として、よく嫁いじめなどをして、若い人達から、早く死ねよかしに扱われるものだが、おかんは
その点でも、立派であつた。一家の者は、この人のよい、思いやりの深い親切な、それでいて (b)カイカツな老婦人が、半年でも
一年でも、生き延びてくれるようにと、祈らないものはなかつた。従つて、おかんが死際に、耳にした一家の人々の愁嘆の声に、
微塵虚偽や作為の分子は、交つていない訳だつた。

おかんは、浄土に対する確かな希望を懷いて、一家の心からの嘆きの裡に、安らかな往生を遂げたのである。万人の免れない臨
終の苦悶をさえ、彼女は十分味わずに済んだ。死に方としてはこの上の死に方はなかつた。死んで行くおかん自身でさえ、段々消
えて行く、狭霧のような取止めもない意識の中で、①自分の往生の安らかさを、それとなく感じた位である。

(中略)

再びほんのりとした意識が、還つて来るまでに幾日経つたか幾月経つたか、それとも幾年経つたか判らなかつた。ただおかんが

氣の付いた時には、其処に夜明とも夕暮とも、昼とも夜とも付かない薄明りが、ほんやりと感じられた。右を見ても左を見ても、
灰色の薄暗が、層々と重つていた。足下にも汚れた古綿のような暗があつた。それを踏んでいるおかんの足が、何かたしかな底に
付いているのかどうかさえ、彼女には分らなかつた。ただ行手にだけは、右や左や上下などよりも、もつとあかるい薄暗があつた。
ほのぼのとした光明を包んだような薄暗があつた。おかんは左右を顧みないで、ただ一心に行手を急ぐより外はなかつた。

(中略)

何等の区劃もなく無限に続いている時と道とを、おかんは必死に懸命に辿り続けるだけであつたが、どんなに道が長く続いても、
勇ましく進むことが出来た。周囲は暗かつた、背後を顧みると累々とした闇が重つて行く。が、前途だけには、ほのぼのとした光
があつた。どんなに、この道が長く続いても、何時かは極楽へ行けるのだ。有難い御説教で、幾度も聞かされた通りお浄土へ行け
るのだ。配偶の宗兵衛にも十年振に、顔を合わせることが、出来るのだ。そう思うと、おかんは新しい力を感じて来て老の足に力
を入れて、懸命に歩き続けるのだった。

(中略)

氣が付くと自分の立っている所から、一町ばかり向うに、お西様の勅使門を十倍にもしたような大きさの御門が立っていた。お
かんは、その門がきつと極楽の入り口だと思つたので、急いで門の方へ行つて見た。門の方へ行つて見ると門の扉は八文字に開か
れていた。おかんは、オズオズとその大きく開かれた御門の中に入った。御門の中の有様は、有難い御經の言葉と寸分違つていな
かつた。

おかんは極楽を一目見ると、嬉しさに涙が止め度なく流れて来た。極楽に往生し得た身の果報が、嬉しくて堪らなかつた。
※本願寺の門主
 御門跡様を初、お寺様のお言葉の真実が、身にヒシヒシと感ぜられた。よくも、弥陀如来の本願を頼み奉つたものだと思つた。もし、信心が薄くて、こんな果報を取り逃がして、地獄へでも落ちていたならば、今頃はどんなであつたろうと思うと、思わず身体が戦き顫うのを感じた。おかんは、感極つて『南無阿弥陀仏々々々々々々』と、幾度も繰返した。その声に応ずるように御姿だけは幾度拝んだか分らない阿弥陀如来が忽然として、咫尺の間に出現し給うた。おかんは、御仏に手を取られて夫宗兵衛の坐つてゐる蓮の台へと導かれた。おかんは、絶えて久しい夫の姿を見ると、わっ！と嬉し泣きに泣きながら縋り付いた。が、不思議に、宗兵衛は余り嬉しそうな顔をしなかつた。『お前も来たのか』と云うような表情をしながら座を滑べつておかんの為に半座を分けてくれただけである。

それでも、おかんは落着くと、夫と死に別れてから後の一部始終を話した。当代の宗兵衛が、家業に精を出す事やら嫁のお文が自分に親切にしてくれたことや、孫娘のお俊が可愛くて堪らなかつたことなども、クドクド話し続けた。そうして娑婆の話が何日となく続いた。一家の中の話は、幾度も繰返し話した。(中略) 宗兵衛も面白そうに聞いていた。が、幾日々々も話している中には、大抵の話は尽きてしもうた。おかんは、話が絶えてしまふと初て落着いて、極楽の風物を心から楽しもうとした。何処を見ても燦然たる光明が満ち満ちている。空からは縹渺たる天樂が、(C)フダンに聞えて来る。おかんは、恍然としてそうした風物の中に、浸りきつていた。楽しい日が続いた。暑さも寒さも感じなかつた。色食の慾もなかつた。百八の「X」は、夢のように、心の中から消えていた。極楽の空がほがらかに澄んでいるように、心の中も朗らかに澄んでいた。

「ほんとうに極楽じゃ。針で突いたほどの苦しみもない」と、おかんは宗兵衛の方を顧みて云つた。が、^②宗兵衛は不思議に、何とも答えなかつた。

同じような日が毎日々々続いた。毎日々々春のような光が、空に溢れている。澄み渡つた空を、孔雀や舍利が、美しい翼を拡げて舞い遊んでいる。娑婆のように悲しみも苦しみも起らなかつた。風も吹かなかつた。雨も降らなかつた。蓮華の一片が、散るほどの変化も起らなかつた。おかんの心の中の目算では、五年ばかりも蓮の台に坐つていただらう。「何時まで坐るんじやろ。何時まで坐つとるんじやろ」と、おかんは或日ふと宗兵衛に訊いてみた。それを聴くと宗兵衛は一寸苦い顔をした。「何時までも、何時までも、何時までもじゃ」と、宗兵衛は吐き出すように云つた。

「そんな事はないじやろう。十年なり二十年なり坐つてゐると、又別な世界へ行けるのじやろう」と、おかんは、「Y」に落ちないように訊き返した。

宗兵衛は苦笑した。

「極楽より外に行くところがあるかい」と、云つたまま黙ってしまった。そう聴かされてみるとおかんにも宗兵衛の云つてゐる事が、本当であることが、解つた。御門跡のお話にも、お寺様の話の中にも、極楽以上の世界があることなどは、まだ一度も聴かされたことがなかつた。もう自分達も仏になつてゐる以上、それより外になり様はないのだと思つた。

無事な平穏な日が、五年経ち、十年経ち、二十年経ち、三十年経つた。もうおかんが、極楽へ来てからも、五十年近くの日が経つた。最初は、あのように莊嚴美麗に感ぜられた七重の羅網も、七重の行樹も、何の感銘をも、おかんの心に与えなかつた。(中

略)五十年近くの間、毎日同じものを見ているので、見るものにも飽いてしまったのである。

「ほんまに、何時までも、ここに坐つとるものか知らん。百年か千年か、坐り続けたら、何処か別な所へ行けるのではないかしら」

もう、何十年振かにおかんは、そんな疑問を宗兵衛に訊いてみた。その宗兵衛の顔さえ、年が年中五寸と離れない所にあるので、この頃は何となく鼻に付きかけている。

「くだい！ 何時までも、何時までも、何時までもじゃ」と、宗兵衛は何十年前に云った答を繰り返した。

もののうい倦怠が、おかんの心を襲い始めた。娑婆に居る時は、信心の心さえ堅ければ、未来は極楽浄土へ生れられるのだと思うと、一日々が何となく楽しみであった。あの死際に、可愛い孫女の泣き声を聞いた時でも、お浄土の事を一心に念じていると、あの悲しそうな泣き声までが、いみじいお経か何かのように聞えていた。娑婆から極楽へ来るまでの、あの気味の悪い、薄闇の中を通る時でさえ、未来の楽しみを思うと、一刻でさえ足を止めたことはなかった。あんな単調な長い長い道を辿った時でも、心だけは少しも退屈しなかった。③不退転の精神が、心の裡に燃えていた。ところが、その肝心の極楽へ来てみると、如何にも苦も悲しみもない、老病生死の厄もない、平穩な無事な生活が、永遠に続いて行くのである。が、おかんには、今日と同じ日が何時までも続くかと思うと、立っていても堪らないような退屈が、ヒシヒシと感ぜられるのであった。が、おかんが退屈しようがしまいが、お介意なしに同じような平穩な平和な光明の満ち溢れた日が、毎日々々続いた。

それから、また十年も経った頃であった。その頃になると、おかんと、宗兵衛とはかたみ代りに、欠伸ばかり続けていた。或日のこと、おかんはふと気が付いたように云った。

「地獄はどんな処かしらん」

おかんに、そう訊かれた時、宗兵衛の顔にも、華やかな好奇心が咄嗟に動くのが見えた。

「そう？ どんな処だろう。恐ろしいかも知れん。が、ここほど退屈はしないだろう」そう云ったまま宗兵衛は、黙ってしまった。

おかんも、それ以上は、話をしなかった。が、二人とも心の中では、地獄の有様を各自に、想像していた。

又五年経ち十年経った。年が経つに連れて、おかんは極楽の凡てに飽いてしまった。五十年七十年の間、蓮の花片一つ落ちるほどの変化さえなかった。宗兵衛とも余り話をしなかった。凡ての話題が彼等に古くさくなってしまったのである。彼等がまだ見た事のない④『地獄』の話をする時だけ、彼等は不思議に緊張した。各自の想像力を、極度に働かせて、血の池や剣の山の有様をいろいろに話し合った。

こうして、二人は同じ蓮の台に、未来永劫坐り続けることであろう。彼等が行けなかった『地獄』の話をするをただ一つの退屈紛らしとしながら。

(菊池寛『極楽』による)

問一 部(a) (c) のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 「X」には漢字二字の、「Y」には漢字一字の言葉が入る。その言葉を、それぞれひらがなで答えなさい。ただし「X」は四字、「Y」は一字で答えること。

問三 部①「自分の往生の安らかさ」とあるが、どういう点で「おかん」の死は「安らか」だったのか。そのような「安らかな」死を「おかん」が迎えられた原因も分かるように説明しなさい。

問四 ――部②「宗兵衛は不思議に、何とも答えなかった」とあるが、これはなぜか。その説明として最も適當なものを選びなさい。

ア 宗兵衛は、極楽に苦しみが少ないとは感じていたが、苦しみが全くないとは思っていなかったから。
イ 欲望を捨て去った宗兵衛は、苦しみがないことを喜ぶという気持ちとも無縁な境地に至っていたから。
ウ 先に極楽に来た宗兵衛は、極楽に生きることのつまらなさを理解していた分、おかんの感想には同意しなかったから。
エ 同じ話を繰り返しおかんに対して、宗兵衛は嫌悪感を抱いており、おかんに同意する気が起きなかったから。
オ 宗兵衛は、極楽こそが最良の場所だと思って疑われないような、厚い信仰心を、おかんと違い持ち合わせていなかったから。

問五 ――部③「不退転の精神」とはどういう精神か。その説明として適當なものを二つ選びなさい。

ア 必ず浄土にたどりつくのだと信じ、勇気を持ち続ける精神。
イ 救いなき闇でしかなかった人生から脱し、光をつかもうとする精神。
ウ 退屈なものであれ、否定せずに受け入れようとする精神。
エ 苦しみから解放されることこそが素晴らしいと考える精神。
オ 宗兵衛との再会を願ひ、無限の道をひたむきに進む精神。
カ よりよい世界を自ら作り出す為に、前を向き続ける精神。

問六 ――部④『地獄』とあるが、ここで地獄に「」をつけているのはなぜか。その解釈として最も適當なものを選びなさい。

ア 想像力の働く余地をなくすものという、一般的な地獄のイメージとは異なり、ここではむしろ、人間の想像力を刺激するものとして地獄がイメージされており、地獄と呼ぶことがためらわれてしまうから。
イ 永久不変なるものという、地獄の持つイメージはここでは見失われており、むしろ、ここでは、変化と刺激をもたらすものとして地獄が認識されていて、真の意味での地獄とは違うものになっているから。
ウ タイトルが『極楽』であるのに反して、この小説で本当に描きたかったものは、実は地獄の方であったということを読者に気づかせるには、『地獄』という強調表現を用いるのが有効であるから。
エ 本来地獄は、人間に苦しみを与えるものとして想起されるが、ここでの地獄は、むしろ、想起することで喜びをもたらすもの、言わば極楽のようなものとしてとらえられており、本来的な意味を失っているから。
オ この小説は、実は極楽こそが地獄であり、地獄こそが極楽であるという認識を示すものであるが、そのような認識を、読者自身に読み解いてもらうためのヒントとして、『地獄』という強調表現は有効だから。

問七 「おかん」にとって、「地獄」の話をすることが楽しみなったのはなぜか。本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

問八 次の作品の中で、菊池寛が書いたものを一つ選びなさい。

ア 恩讐おんしゅうの彼方に

イ それから

ウ 破戒はかい

エ 古都

オ 菌車

カ 細雪さいせつゆき

解答は、いいいいに書くこと。
記号や句読点も一字に数えること。
※欄には記入しないこと。

受験番号			
氏名			
※			

—

問一

a
b
c

問二

問三

--

問四

--

※

問五

--

問六

--

※

問七

--

問八

--

二

問一

a
b
c

問二

X
Y

※

問三

--

問四

--

問五

問六

--

問七

--

※

問八

--